
ムシウタ 悪夢

人知らず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ムシウタ 悪夢

【Nコード】

N4192T

【作者名】

人知らず

【あらすじ】

『虫』

それは『夢』と引き換えに超常の力を与える存在
『虫』に憑かれるとその先に待っているのは決して幸福などではない。
い。

これは願ってはいけない『夢』を持つ一人の少年の物語

それは最低で最悪のボーイ・ミーツ・ガール――

夢の記憶

『お前の夢とはなんだ』

「俺の夢？ そんなの．．．みんなが幸せでいられる事に決まってるだろ？」

『．．．自らを偽るか．．．それもよからう．．．ならば我が氣付かせてやろう．．．お前の本当の夢を』

「俺の．．．本当の夢．．．？」

「．．．．．なんでだよ」

俺が何をやった？

何でこんな・・・こんなことにならなきゃいけないんだよ!!

「母さん・・・父さん・・・姉ちゃん・・・う、うあああああ
ああああ!!!!!!!!!!」

『侵父』・・・お前は・・・お前だけは俺が・・・殺してやる
!!

その日、少年は全てを失った。

家族、友達、希望、そして・・・居場所

ただ、願っただけなのに

自分の夢が全てを壊した。

少年の夢、それは願ってはならない夢だった。

夢の記憶（後書き）

どうも！人知らずです！

今回は初めての二次創作となっています。

まだまだ、未熟なのでうまくいくか不安がいつぱいですが、がんばりますのでよろしく願います。

夢の始まり

少年は『あの日』

全てを失った。

だから、彼に名前はない

名前のない彼は親戚の家に預けられ、そこでもう自分のものではない名前で毎日を過ごした。

叔父も叔母も親切にしてくれた為、不自由はなかったが毎日が退屈だった。

そのころだろうか？自分が変わっていたことに気が付いたのは？

きっかけは叔母が不注意でガスコンロの火を止め忘れて火事になりそうになった時

ただ、燃え上がっていく炎を見て

『あの日』のことを思い出し、恐怖よりも先に苛立ちにも似た感情が浮かんだ次の瞬間には炎が消えていた。

コンロを止めたわけではない。

水をかけたわけでもない。

ただ、炎が消えただけ

おかしいことといえば窓は閉まっているのに風を感じたことくらいだ。

そんなことが何度もあり、さすがの叔父と叔母も彼のことを少しずつ避け始めた。

それでも追い出さなかっただけ優しくかったのかもしれない

だが、『あの日』にも似た『その日』は突然、何の前触れもなく、当たり前のように訪れた。

「君はご在宅ですか？」

深夜の4時

白いコートに黒いゴーグルという異質な格好をした男達が尋ねてきた。

叔父と叔母は俯きながらも少年の部屋を指差し、男達に道を譲る。それを見ていた彼は状況をうまく把握できていないのにも関わらず、冷静に悟っていた。

自分が叔母達に裏切られたのだということを

「………ありがとう」

聞こえるはずのない別れの言葉を継げて、窓から外へ出る。

これが二階だったら、一苦労しただろう

街灯が照らしだす道の中を走りながら考える。

俺は何で逃げてるんだ？

別に逃げる必要はないはずだ。

男達が悪人ならともかく何者か分かっていないのに逃げているのは何でだ？

どれだけ考えても分からない

考えることにばかり気を取られすぎて

いつの間にか男達がすぐ後ろまで追いついてきていることに気が付

くのが遅れた。

一人が彼の前に立ちふさがると同時に男達が俺の周りを完全に囲み逃げ道をなくした。

最初に動いた一人は暗闇でよく見えなかったが街灯に照らされた姿は俺とそんなに年の離れていなさそうな少女だった。

「――君、僕達は特別環境保全事務局だ。おとなしく捕まってくれるならそれでいいけど抵抗するなら……虫を殺しちゃうぞ」

「……………虫？」

彼の反応に少女の動きが固まった。

「…………え〜と…………君って虫憑き…………だよね？」

「……………虫憑き？」

彼の反応に今度は深いため息をこぼす。

彼はというと冷静に少女の言葉の意味を考えていた。

まずは『虫』

俺の考える虫というのは蝶とか蜂なのだが雰囲気からして別の何かのようだ。

次に『虫憑き』

良く分からないが幽霊か何かの話だろうか？

「…………たまにいるんだよね〜君みたいな虫のこと知らない奴とか…………でも、そういうのはこうすればいいんだよねッ!」

少女の言葉と共に現れたのは化け物だった。

姿こそアブラゼミのように見えたが、明らかに大きいし、羽が六枚もある。

異形の化け物を見て女の言っていた虫とは何なのかを理解した。

「・・・・・・これが虫？」

「そう、これが虫さ！君にもいるだろう？自分の虫が！」

俺の虫？

そんなものがあるならとつくに呼んでる。

でも、最近のことが俺の虫が原因だとすれば・・・・・・

「呼ばないの？それとも余裕な感じなのかな？・・・・・・なら、こっちから行くよ！」

少女の号令で周りにいる男達のそばにも化け物が現れる。

完全に囲まれて、逃げ道もない。

そんな絶体絶命の状況で彼の中に浮かんできた感情は悲しみでも恐怖でもなく・・・・苛立ちだった。

突然過ぎる理不尽さとも何も出来ない自分への苛立ち

そして、自分の中の『何か』が動き出すのを感じた。

彼の右側の男のそばにいるミツバチに似た化け物が俺に向かって針を突き出して突っ込んでくる。

それに対して彼が取った行動はそのミツバチに目を向けて一言言うただけだった。

「消える」

ミツバチは彼を針に突き刺す直前で突然の暴風と共に頭の部分が爆ぜた。

そして、次々とミツバチの体は爆ぜていき、完全に消滅した。それと同時に右側の男が膝について倒れる。

死んではいないようだが気絶したというのも違う気がした。

「なかなかやるねえ……でも、私には勝てないかなッ！」

女のアブラゼミと他の虫が一斉に俺の方へと向かってくる。だが……

「……消える」

彼が一言継げると同時に暴風と共に虫達の体が爆ぜていく爆ぜるといつても内側から破裂しているのではなく、むしろ外側からの衝撃で押し潰されているような感じに見える。

虫が次々と消滅し、男達が倒れていく中で少女のアブラゼミだけは無傷で飛んでいた。

「……特殊型だねえ……あたしじゃ敵わなそうだな」

口調は変わっていないが表情から笑みは消えている。

アブラゼミは飛んでいてもこっちへ近づこうとしない。

互いに動かず、時間だけが過ぎていく

そんな中で彼は……飽き始めていた。

基本的に何事にも集中力のない彼にとって今の状況は退屈だった。だからこそ彼は簡単に決めてしまったのかも知れない。

その決断が後々どれだけ大変なことに繋がるかも知らずに

一歩

少女に向かって一歩踏み出す。

少女はアブラゼミを自分の前へ移動させた。

「一日三回しか撃てないからホントは使いたくないんだけどね」

アブラゼミの六枚の羽が輝き始めたと思うとその光は一点に集まり、レーザーとなつて打ち出される。

必殺の一撃は少年の体に・・・到達する前に折れ曲がった。

「なッ!？」

折れ曲がったレーザーは後ろにあつた電信柱を貫通し、道路に線を作り、消滅した。

少年は何もなかったかのように歩を進めている。

再度アブラゼミがレーザーを打ち出すの結果は同じで途中で折れ曲がり、道に線を増やしたただけだった。

「・・・・・・・・負け・・・・・・・・かな？」

少女は観念したのか両手を挙げて降参のポーズを取った。

「そつでもないさ」

彼の言葉に少女は眉を寄せる。

「どつという意味？」

「俺があんたに特別環境ほぜ……何とかってここに連れてって
もらっただけ」

「……君、それ本気？」

「いいんだよ。どうせ俺に居場所なんてないから」

少年の言葉に少女は笑った。

「君、変わってるね」

「それが俺だからね」

そして、少年の物語は始まりを告げた。

夢の始まり（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

夢の一步

少女はゴーグルに向かって話している。

ゴーグルには通信機能が付いているようだ。

しばらくして話し終わったのか少年の方へと近づいてくる。

「連絡終わったよーこれでお迎えが来てくれるからねー」

「…………俺の要望は？」

「モチのロン！誤魔化しておいたよ。君があちし以外の局員を欠落者にしたってこと」

欠落者

その意味を彼は少女から教えられた。

『虫』は人の夢を喰らう代わりに力を貸し、宿主の命令に逆らわなくなる。

だが、その『虫』が死ぬと宿主は何の希望も欲望もなくなり、抜け殻のようになると

それが欠落者というものであるということ

自分が虫憑きである以上、いつかは欠落者になってしまう。

そんな考えが浮かんできたが、そのうちはそのうちだ。

「でも、君ってホントに変わってるよね？とっても強いのに弱い虫憑きだったって報告しろなんて普通言わないよ？」

「いいんだって。俺はめんどくさいことが嫌いな。楽に生きればそれでいいの」

「……やっぱり特殊型は苦手だな」

少女は深いため息を付いた。
特殊型だから苦手とかあるのか？

「何か言いましたか？」

「別に……っというかその口調何？」

「いえ、あんまり素の調子で話しているとボロが出そうなので」

家ではこんな風に話していたし、学校でもこんな感じだった。
特別環境ぼぜ……何とかでもこの調子でいけるだろう。

「……キモい」

同年代の少女にストレートに言われるとかなりショックだったが仕方がない。

せめてもと思い目線を少女から外すと道の奥のほうから数台の車が向かってくるのが見えた。

そのいずれもが漆黒に染め上げられており、かなり不気味だ。

「お迎えが来たよ」

そう言っただけ少女は車に近づいていく

そして、少女と変わるように白いコートと黒いゴーグルをした少年少女が近づいてくる。

雰囲気からして全員虫憑きなのだろう

「？油々？からの連絡があつた通りなら。お前に抵抗する気はない

らしいな。まあ、抵抗しても無駄だな」

「・・・なぜかイラっとするな。

いつその事欠落者にしてやろうか？

ついさつき決断したことを否定するような考えが浮かんでくる。

「？旅人？君。あんまりいじめちゃだめだよ？」

「君付けするな！」

苛立ちを感じるよりも早く少女が戻ってきた。

イラつく年下にも見える目の前の少年は？旅人？という名前らしい。

？旅人？の話から考えればアブラゼミの少女が？油々？なのだろうコードネームか何かなのだろうか？

「とにかく、お前を特環まで連行する」

「連行って・・・」

特環は特別環境ほぜ・・・何とかの略か

「いいから来い！」

旅人に服を引っ張られて車まで連れて行かれる。

力が強すぎて袖が少し破けている。

後で弁償させようと心に誓う。

車に乗せられてから少なからず不安がこみ上げてきたがそれもすぐに

「まあ、何とかなるだろ」と自分の中で解決する。

仕方がない

なぜなら俺に居場所はないのだから

夢の二歩（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

夢の集まる場所

時間が遅いこともあり、いつの間にか寝てしまっていたらしい。車が止まり、隣にいた局員に起こされる。

起きてすぐの機嫌の悪さに顔をしかめながらも局員と共に車を降りる。

車を降りて真つ先に入ってきたのはいたって普通の民家だった。叔父達の家よりは広いと思うが、それでも普通に変わらない。

「ここが特環の基地ですか？なんていうか・・・」

「心配しなくてもお前の思っていることは間違いだ。」

そう言いながら？旅人？は民家の鍵を開けて中へ入っていく。

「ちなみに基地じゃなくて中央本部だよ」

？油々？も後からついていった。

それに続いて続々と局員が入っていくがどう見ても・・・

「通報とかされませんよね？」

「・・・・・・・・」

？旅人？は質問に答えず、奥へと進んでいく。そして、一番奥の壁の前に立つと口を開いた。

「局員ナンバー——」。帰還許可しろ」

その言葉が何の意味を持つのか分からない

一瞬の静寂の後、壁が二つに割れた。

状況を飲み込めないままその中に？旅人？が入っていく。

壁が閉じる直前？旅人？は俺に向かって下を突き出して「アッカンベー」をした。

後で一発殴ろうと心に誓う

「君は私と一緒に行こう！」

？油々？が手を引いてくる。

そして、さっきの？旅人？のように壁に向かって口を開く

「局員ナンバー——です。帰還許可お願いします〜！」

一瞬の静寂の後、再び壁が二つに割れた。

「行こう？」

「は、はい」

？油々？に引かれて中へ入るとどうやらエレベーターになっているようだ。

かなり近代的な作りになっており、外から見た民家からは想像も出ない。

「……ねえ君ってさ、名前なんていうの？」

「名前なんてねえよ」

「いやいや、あるのが普通でしょ。っていつか素に戻るの早すぎ」

「じゃあ、普通じゃないんだろ？それに虫憑きになった時点で普通じゃねえよ」

俺の言葉に？油々？はムツとした表情になる。

「何だよ。俺は当たり前のこと言っただけだろ？」

「自分から普通じゃないなんて言っちゃダメ」

「……………はあ？」

口調を生徒を叱る先生のようにして話す？油々？
彼女の性格がつかめそうにない…………

「ここで自分は普通じゃないって思ってる人はすぐに欠落者になって帰ってくる。自分に負けてる人に虫を使いこなすことなんて出来ないからね」

「じゃあ、俺もすぐに欠落者になるんじゃないの？」

「……………冗談でも言ってイイこととダメなことがあるよ」

そう言う？油々？の表情は真剣な怒りに満ちていた。

その希薄だけで息が詰まりそうになる。

だが、エレベーターの扉が開くと同時に元の表情に戻り、スキップしながら出て行く。

エレベーターの外にはたくさんの人がいた。

そのほとんどが？油々？や？旅人？と同じ白いコートに黒いゴーグルを装着している。

コートの色が違う局員も何人かいるがどういうことなのか？
様々な疑問が浮かんでくるが、とりあえず分かっていることは、こ
れからはここが自分の居場所になるということだけだった。

夢の集まる場所（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

夢名乗る名前

「これより？十星？および？ヒメ？？疾風？の戦闘訓練を始める。
なお、担当局員は火種十号？クサギ？」

そう言った男は他の局員と同じように白のロングコートを羽織っていたが……

「ゴーグル……しないでいいのか？」

「黙れ？疾風？」

？クサギ？はゴーグルを首に掛けているだけで装着していない。

その為、？クサギ？の素顔が見えている。

仮面のような無表情のため感情は読めないが……

ちなみに？疾風？というのは少年の新しい名前だ。

だが名前というのは付けば付いたで面倒なもので

早速、名前を使って叱られている。

そして、今日から？疾風？を含めた数人単位での訓練が行われる。

まあ、強さを偽りたい？疾風？からすれば面倒この上ないのだが……

「この訓練はお前達の虫の扱いがどこまで出来ているかを試す。俺の攻撃を防いで余裕があれば反撃してみろ」

「ハイ！」「」

余裕があれば……ねえ……

「それでは……行くぞッ!!」

？クサギ？の方に虫がとまる。

クサギカメムシという虫に似ているがやはりどこか違う

？クサギ？の虫は宿主の右足へ移動し、光を放つ

その光が眩しいと感じるくらいになった次の瞬間には？クサギ？の体がすぐ隣にあった。

狙われた？十星？も自分の虫であるトオツボシ TENTU に似た虫を出現させ、攻撃に備える。

？クサギ？はというと虫の付いている右足で TENTU を蹴り飛ばす。

見た目からすれば唯の蹴りだが、威力は強いようで？十星？ごと巨大な TENTU が吹き飛ぶ。

その光景を見た？ヒメ？もヒメカマキリに似た虫を出し、？クサギ？へと突っ込ませる。

……が、明らかにまっすぐに単調な攻撃は通用せず、それどころか後ろに回りこまれてカマキリの頭部が吹き飛んだ。

宿主である？ヒメ？は顔を歪めながらも笑みを浮かべた。

頭部を失ったカマキリがゆっくり倒れていく中、？クサギ？の後ろ側から一匹

左右からそれぞれ一匹ずつの合計三匹のカマキリが出現し、？クサギ？に鎌を振り下ろさんとする。

「取った!」

？ヒメ？が喜びの声を上げるが……

「……まだまだ……だな」

左足にも？クサギ？がそう呟くと同時に？クサギ？の左足にも新た

なカメムシが現れ、右足の一匹と同じように光を放つ

三匹のカマキリが鎌を振り下ろしたときには？クサギ？の姿はなく、代わりに自分の後ろの方から短い悲鳴と何かの倒れる音がした。

振り返るとそこには倒れている？ヒナ？とこっちを向いている？クサギ？がいた。

「二人ともまだまだ、訓練は必要だが号指定を受けるほどにはなるだろう。だがお前はどうかナッ！」

また、一瞬にして目の前に？クサギ？が移動する。

さっきからの戦闘を見る限りでは？クサギ？の虫の能力は虫のとまっている部分の強化

筋力が強化されているのかそれともまた違う何かなのかまでは分からないがとにかく、その力はかなりのものだと分かる。

高速移動もそれによってできる芸当だろう

だが、いくら速くても・・・風には勝てない心に念じる。

虫に自分の命令どおりの動きを・・・守れ！

？クサギ？の蹴りよりも速く、俺の周りには風の防御壁が張られた。蹴りが当たってもまったくびくともしない。

「・・・・・・特殊型だったんだな」

「あんたは分離型だろう？しかも打撃専門の」

？油々？に教えられた特殊型の特徴で打撃では特殊型の虫は殺せないと聞いている。

もしも？クサギ？の力が俺の思っている通りならこの訓練・・・いける！

「打撃だけで何とかなればいいんだけどな・・・特環はそんなに甘くないんだよ！」

そう叫んで何を思ったのか自分の手のひらに傷を付け、血を出し始める。

訓練はそう簡単に終わりそうにない。

夢名乗る名前（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

夢の暗い闇

「な、なにやって」

「確かに俺みたいな打撃中心の虫憑きは特殊型の虫を殺すには不向きだ。でもな……勝てないわけじゃない」

そう言うത്？クサギ？はしゃがんで血で真っ赤に染まっている両掌を足で光っている自分の虫に押し付けた。

血がカメムシの体を赤く染めていき、光の色も白から赤へと変わっていく。

立ち上がった？クサギ？は首に掛けていたゴーグルを装着した。

「お前の力は風を媒体にしているようだが俺の速さは……光の速さだ」

？疾風？が身構えるよりも速く、突然に、忽然と……？クサギ？が消えた。

瞬きもしていない
目も離していない
なのにも関わらず？クサギ？が動いたことに気づけなかった。

？クサギ？の姿を探すがどこにも姿がない
ただ、静かな訓練場は無音のままだ。

もしかして、いなくなったとか？

そんな風に考えたとき、声はすぐ隣から聞こえた。

「気を抜くな」

ほぼ反射的に声の方向を見るが誰もおらず、遠くのほうで？十星？

が自分の虫にもたれ掛かりながら立ち上がったのが見えただけだった。

・・・・・・速すぎる

光の速さというのは嘘だと思うがそれでも目が追いつかない
どうするかと考えをめぐらせようとしたが、それよりも速く、腹部
への衝撃を感じて次の瞬間には体が宙を舞っていた。

咄嗟に風で地面に激突する衝撃を和らげたが、腹部の痛みはかなりの物だ

もしかしたら、骨の一本や二本位折れているかもしれない

・・・・・・意識が薄れていく

大体、俺は訓練なんてどうでもいいんだ。

能力はうまく使えていたし、本気を出すことも無い。

俺がやりたいのはこんなことじゃない

俺はただ殺せれば・・・・・・

『お前に休息は許されぬ』

頭の中に声が響いた。

いや、声ではないのかもしれない。

だが、この声には覚えがあつた。

『奴』だ。

俺の殺すべき相手……『侵父』

夢の暗い闇（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

夢の悪魔

【緊急連絡！正体不明の虫憑きの侵入を確認。現在火種三号？霞王？が対応中の為、近辺の局員は援護に向かつて―――】

スピーカーからの音が途切れた直後、訓練所の壁の一部が轟音と共に吹き飛んだ。

壁の向こう側から現れたのは白いロングコートとゴーグルを装着した金髪の少女

その周りには大量の霞が舞っている。

だが、額から血を流し、ゴーグルにひびが入っている。

タイミングからすると彼女が？霞王？なのだろう

火種三号ともなれば戦闘力は相当なものはずだがその彼女は『何か』から逃げるようにして壁の穴から遠ざかっている。

そして、『何か』はゆっくりと姿を現した。

体中から禍々しい黒い煙・・・障気を噴出しながら動く姿は異様だったがその姿は？疾風？の良く知った姿だった。

？クサギ？が光速の移動を止めてその姿を見ながら呟いた。

「・・・何故・・・『侵父』が・・・」

穢れたボロボロのローブに身を包んだ存在・・・『侵父』は人間ではありえない動き、地面を滑るようにして？霞王？に近づいていく。

？霞王？は見るからに特殊型の虫憑きであることが分かる。

火種三号なのだから普通の虫憑きの中では強いほうのはずだ。

だが、相手は普通の虫憑きが勝てる相手ではない

そのことは分かっているはずなのに霞を鋭い爪の形に変え、『侵父』と貫こうとする

その爪も『侵父』の周りに漂う障気にぶつかると思形を崩して元の霞に戻ってしまう。

壁の破片に爪を突き立てて『侵父』に投げつけるがそれもロープの内側から溢れ出した芋虫の大群によって防がれてしまう。

『侵父』を殺すどころか相手にもされていない自分が情けない

奇襲を狙ったのか？クサギ？が『侵父』の背後に光速移動をするが蹴りを放つ前にピタツと止まり、直後に頭を押さえてうずくまる。何をしたのかまったく分からなかった。

『侵父』は？クサギ？のことをまったく相手にせず、？霞王？に近づいていく

その光景を見ながら？疾風？は考えていた。

俺はまた逃げるのか？

何もせずに誰かが傷つくのを見ているだけしかないのか？

俺はあの時とは違う。

今の俺には『虫』という力がある。

『あの日』を繰り返したりはしない！！

「『侵父』 ツツツツ！！！！！！」

叫びと共に？疾風？の体が蒼い光に包まれる。

その光は広がっていき、？十星？や？ヒメ？を包み込もうとしていた障気を消し飛ばした。

光が？クサギ？のところまで広がると？クサギ？はゆっくりとふらつきながらも起き上がった。

光が広がるにつれて自分の中から何かが抜け落ちていくのが分かったが、気にならない。

むしろ、我慢していた力を一気に解放したことで清々しくすら感じた。

『侵父』は動きを止め、ゆっくりと振り向く

『我が子よ……何故邪魔をする……………』

ひび割れた音

汚らしい鐘の音と声が同時に聞こえた。

「誰がお前の子だ！俺はお前を殺す。ただそれだけなんだよ！」

先ほどの訓練の中、感じていた違和感

自分の能力の理解ができていなかったことが今なら良く分かる。

力の解放と共に理解した俺の本当の能力

その力をここで全て使い殺す。

俺の全力で殺してやる。

『私の邪魔をするならば……………お前も我が力の前に倒れふすがいい……………』

「誰がお前なんかに負けるか！」

『侵父』の体から噴出す障気は？疾風？の放つ蒼い光に触れた瞬間消し飛ぶ。

『侵父』のローブの内側から溢れ出した大量の芋虫が迫る。

「デメエ！オレ様を無視してんじゃねえ！」

？霞王？の爪による一撃で芋虫の半分ほどが消し飛ぶ。

「三つ星！」

そう叫ぶと同時に体の表面にある斑点のうち三つを光らせた？十星

？の虫が衝撃波を放ち、大量の芋虫を吹き飛ばす。

？クサギ？と？ヒメ？もそれぞれの虫と能力を駆使して芋虫の数を減らしていく。

「消える」

？疾風？が呟くと芋虫たちがはじけ飛ぶ。

連鎖的に何度もそれが繰り返され、芋虫は最後の一匹までいなくなつた。

『侵父』が再び芋虫を繰り出そうとするのを見て、まだ使っていない能力を発動した。

『侵父』の動きが突然止まり、水で出来た水晶のようなものに包まれる。

それは瞬時に凍結し、『侵父』を中に閉じ込めた氷の檻が完成した。？霞王？以外の全員が啞然とする中、氷の檻が『侵父』ごと砕け散つた。

夢の悪魔（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

夢見る決意

？十星？と？ヒメ？が砕け散った氷を見て喜びの声を上げている。
？クサギ？は虫を足に付けた状態のままゴーグルから連絡を取っている。

その場にいる者は危機が去ったことを確信していた。

？霞王？と？疾風？以外は・・・

「バカかテメエらは！こんなんで倒せる相手ならとつくの昔にオレ様がぶっ倒してんだろぅが！」

？霞王？の言うとおり『侵父』はまだ倒せていなかった。

辺りを漂う障氣が一点に集まり、ボロボロのロープを纏った『侵父』に姿を変える。

『侵父』は先ほどと同じように地面を滑るようにして逃げ始めた。

「逃がすかよ！」

？霞王？の爪は『侵父』の真上の天井を破壊し、その瓦礫が『侵父』へと降り注ぐ

避けようとする『侵父』だったが、？クサギ？が瓦礫に手をかざすと瓦礫の落下が一気に早くなった。

よく見ると瓦礫の一つ一つにクサギカメムシがくっ付き、光を放っている。

『侵父』が逃げるよりも速く瓦礫が『侵父』へと降り注いだ。

？クサギ？が顔を歪めて胸を押さえる。

足に付いた二匹が残っているため欠落者にはならなかったようだがすぐに能力を使うのは無理そうだ。

？霞王？もかなり息が上がっている。

まともに戦えるのは？疾風？？十星？？ヒメ？の三人だけ
号指定にもなっていない虫憑きが勝てるわけが無い

瓦礫のしたから黒い障気が噴出しているところを見るとまだ倒せて
いない

．．．．．どうするか

『愚かな我が子よ．．．自らの夢を忘れたか．．．』

「俺の．．．夢．．．？」

そんなのと続けようとしたが、止まった。

俺の夢．．．．．なんだった？

俺が虫憑きである以上、俺にも夢があつたはずだ。

なのに．．．．．思い出せない

『お前の夢．．．それは決して許されはしない．．．．．』

許されない．．．．

『お前は自らの夢によって．．．．．全てを失った．．．．．』

俺のせいで．．．．．

『お前が望むことは罪．．．．．』

望んではいけない．．．．．

『侵父』の言葉を聴きながら俺は『あの日』のことを思い出してい
た。

夢見る決意（後書き）

ご意見・ご感想お願いします。

夢願う過ち

あこのころの俺はいたって普通だった。

特に目立つわけでもなく、暗いわけでもない。

どこにでもいるただの中学生だった。

毎日を何となくで過ごし、無駄に時間を使う。

そんな毎日が俺は嫌いだった。

だからなのか？

『あの日』は突然やってきた。

何となくで決めた陸上部の練習を終えて、日の沈み始めた薄暗い帰

り道。

不意に呟いた一言

「俺に――がぁあればなぁ」

覚えていないがその一言が全てを壊した。

鐘の音が聞こえた。

穢れた聞いただけで不愉快な気分になるような音

次の瞬間には俺は真っ暗な空間の中にいた。

穢れた鐘の鳴り響く・・・・・・・・教会の中に・・・

『お前の夢は許されぬ・・・・・・・・』

教会に声が響いた。

ノイズのようなひび割れた耳障りな声

その声を発した主はゆっくりと俺の前に姿を現した。

「だ、誰だよ！お前」

『我が名はディオレストイ・・・・お前達が『侵父』と呼ぶもの・・・』

今思えばこの時、恐怖で気を失っていればよかったのかもしれない。
だが、俺はむしろ気をしっかりと保つことばかり考えていた。

『少年よ・・・・お前の夢とは何だ？』

「俺の……夢？」

何度も言うがこの時の俺には気をしっかりと保つことしか頭に無かった。

だからこそしっかりと考えることができていなかったんだ。

「俺の夢は……みんなが幸せでいられること」

『自らを偽るか……それもよからう……我が気づかせてやろう……お前の本当の夢を』

「俺の……本当の夢？」

その直後、俺の周りに光が戻ってきた。

気が付くと俺はいつもの帰り道に戻っていた。

腕時計で時間を確認すると門限の5分前

今見たものを疲れからの幻覚だと勝手に納得し、家へと走って向かった。

「ただいま」

門限ギリギリで何とか変えることが出来たこともあり、比較的大きな声で言ったのだが返事が無い。

それどころか家の中からは物音一つしていない
不安になってリビングを覗いた俺が見たのは漆黒のマントに体全体を包んだ人影と………重なるようにして倒れている父さんと母さんだった。

「父さん！母さん！」

近づこうとした俺だったが黒マントが目の前に立ちふさがった。
マントに隠れた顔から表情は分からない。

黒マントが指を鳴らすと俺の後ろから大きな音がした。

まるで何かが潰れるような音が……

振り返った俺はさっきまで無かったはずの真っ赤な水溜りとその真ん中にあるものを見ていた。

元は人間だったもの

俺の妹……美羽^{みう}だったはずの物

それが一つの真っ赤な塊になって俺の目の前にあった。

塊の中に俺が誕生日に送ったリボンが血に染まって混ざっている。

人は自分の理解できる範囲を超えたことが起きた場合思考が停止するらしい

俺もそうだったらどれだけよかったか

しかし、俺の頭は状況をただ冷静に確実に理解していた。

「——ッ！！」

そこからはどうなったのか良く覚えていない

覚えているのは穢れた鐘の音が響いたこと

耳障りな声で問われたこと

そして……その場では誰も願わないだろう俺の『夢』をその声に向かって告げたことだけだった。

「俺は……今の居場所を壊せる力が欲しい」

夢願う過ち（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

夢望む鬼神

そつだ．．．俺の夢は．．．許されない

父さんも母さんも美羽も．．．俺が殺したんだ．．．
今思えばあの黒マントは虫憑きに違いない

虫憑き

『侵父』

黒マント

「．．．そつか．．．俺が殺らなきゃいけないのは．．．
『侵父』だけじゃないのか」

『我が子よ．．．自らの夢を思い出し．．．絶望したか？』

？ヒメ？と？十星？の相手をしながら聞いてくる。
その声が．．．気に障るんだよ！！

「絶望だあ？．．．そんなの．．．するわけ無いだろ？」

『．．．愚かな者よ』

愚か？俺がか？

．．．そうかもしれないな
でもよ、愚かでも惨めでも滑稽でも何であつても．．．殺すし
か俺には出来ないんだよ

「…………『侵父』…………お前の罪は…………俺の昔を思い出させたことだ」

再び俺の体を蒼い光が包み込む

力があふれてくると同時に自分の中の何かが失われていく

だが、今はそれすら心地いい

たぶん俺は今笑っているんだろう

どんなときよりも楽しそうに

どんなときよりも明るく

どんなことよりも戦いに喜びを感じている

「…………行くぜ？クソ野郎！」

自分の周りに氷の槍を複数展開

さらに体の表面に風の防護壁を張る。

足元に風を圧縮し、それを開放することで一気に加速

蒼い光で障気を消し去りながら『神父』に接近

『神父』は芋虫の壁を作り防御しようとするがそれよりも速く氷の槍で壁を崩す

さらに『神父』に向かって更なる力を使う

「轟け！」

『侵父』が新たに作ろうとしている芋虫の壁

その内側で紫の光が走った。

その光は芋虫の壁を妬き崩しただけでなく『侵父』のローブを焦がしている。

その場を離れようと？ヒメ？？十星？を軽くいなして移動し始めるが

「焼き焦がせ！」

『侵父』の周りにかすかに紫の光が走った直後
特環の施設を揺らすほどの衝撃と共に紅蓮の炎が『侵父』を包み込
んだ。

その光景を見て？霞王？が初めて表情を変えた。

「・・・炎、電気、氷、水、風・・・・・・アイツの媒体は・・・・空
気か」

夢望む鬼神（後書き）

ご意見・ご感想をお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4192t/>

ムシウタ 悪夢

2011年10月8日10時16分発行